教育長だより　No. 28

２０２３年１月４日

新年のスタートに「ふるさと」を考える

『ここは なぁ～んもなか！
こがんとこ 住まれん！』

『わっかとは（若者は）おらんし、仕事はなかし、年寄ばっかりで、こがんとこおってもしよんなか！』
（以上は長崎弁です。）こう言うお年寄りがどんどん増えているとのことです。
　これは、１１月に文部科学省と長崎県教委が開催した「市町村教育委員会研究協議会」（西日本ブロック）での基調報告で、前長崎県教育長の江頭明文さんが冒頭に語られた言葉です。

　2014年、「新世界３大夜景」に上海、香港とともに選ばれた長崎。「坂の町」とも言われるすり鉢状の市街地は、日本一の夜景を作り出しています。私は研修の前日、日曜日の夕方に長崎入りしました。実に３０年ぶりです。大阪の中学校にいた頃、修学旅行とその下見、そして、長崎の先生たちとの交流で、私はほぼ毎年訪れていました。久しぶりなので、夜景を見ようと稲佐山（333m）に上がりました。当日は快晴、展望台からは東シナ海に沈む雄大な夕日が見えました。左手には世界遺産の軍艦島（端島）が小さく見えます。一方、右手には遠くに五島列島（ＮＨＫの朝ドラ「舞い上がれ！」の舞台）が連なっていました。しばらくして、今度は東側の市街地が見える側へ。暗くなるにつれて街の明かりが輝きを増していきます。６時過ぎには、眼下にすばらしい夜景が広がりました。
　さて、夜景を見てロープウェイで降りてきました。わずか５分の乗車ですが、もうすぐ下の駅というところでは、家々の明かりが手に取るように見えます。しかし、いくつかの家は真っ暗。私は「どうしたんやろ？」「家族で晩御飯でも食べに行ってるんかな？」ぐらいにしか思いませんでした。

　そんな疑問が、翌日の研修会の基調報告で解消しました。講師の江頭さんは、長崎市の山手の上の方にある自宅をスライドで見せながら次のように話されました。

　私の家の隣や近所には、夜、暗い家がいくつもあります。若い人がみんな出ていくんです。坂が大変で。若者は中心部のマンションに住んだり、あるいは、福岡や東京などの大都会に出ていくんです。長崎市（人口40万人）ですら、こうした過疎化が今大きな問題になっているんです。離島（長崎は全国一の離島数あり）なんかでは、これはもっと深刻です。
　（江頭さんの話は続きました。）
　今、長崎で起こっている「過疎化」の問題は、何もここだけのことではありません。多くのお年寄りが「ふるさとへの愛着や誇りが大事」と思いながら、止められない過疎化の中で、先の言葉のように否定的に言わざるを得ない状況にあります。「過疎化」は全国で起きている問題です。各地で人を

呼び寄せる取組みを行っていますが、一時的に人の取り合いをしているだけです。基本的には日本中がこの過疎を避けることはできません。日本の人口自体が減っているんですから。それだったら、今後ますます過疎化は進んでいくということを前提とした施策が必要なんだと思います。そこで、私たちは「長崎ＳＤＧsクラブ」というのを立ち上げました。そして、『人生１００年時代の教育を考える』として、「持続可能なふるさと＝長崎」の作り手を育てることをめざしています。教育は未来志向です。予測不可能な変化の激しい社会だからこそ、子どもたちがこれから１００年生きていくうえでの基準となるのが、今住んでいるふるさとです。子どもたちにとって、自分が生まれ育った家庭が、そして、地域がその基準となります。親や地域のおっちゃん・おばちゃんの「ぬくもり」が、家族への、また、ふるさとへの「愛着と誇り」になるのです。「ふるさとを愛する子は、ふるさとに愛された子」です。今ここで、自分の住んでいる町で、子どもから高齢者までのさまざまな人との結びつきを再構築し、地域で生きい生きと暮らしていくことこそが求められています。

このように江頭さんは、地域の子どもから高齢者までが「つながりで育む人」、そして、「ふるさとの担い手」の育成の重要性を語られました。

ところで、野洲市では、来年度各学校のコミュニティスクール化を順次図っていきます。学校と地域・家庭が一体となって地域の子どもを育て、学校を核として「ふるさと」で子どもと大人が共に生きいきと暮らしていく取組みです。長崎の江頭さんが語られた「ふるさと教育」は、まさにこのコミュニティスクールに重なります。

今、高校生以下の子どもたちは、その半分が１００歳を超えて生きると言われています。そんな「人生１００年時代」の子どもたちの『生き方の原点』となるのが、「ふるさと＝野洲」のコミュニティスクールです。

本市は人口が微増傾向ですが、野洲駅から離れた地域では過疎化が進んでいます。また、駅に近くても旧市街地でも長崎市と同様の傾向が見られます。さらに、それに合わせるかのように「人のつながり」が希薄化しています。コロナ化がそれに追い打ちをかけました。

この打開策としての『人生１００年時代のまちづくり・人育て』が求められています。子どもから高齢者までが豊かにつながり、それぞれの地域で生きいきと暮らしていけるまち＝野洲、これが市長が言われている「にぎわいのあるまち＝野洲」であると思います。そして、それを教育の部分でリードしていくのがコミュニティスクールではないでしょうか。

年の初めにあたり、「人とのつながり」を育む場としての教育（保育）の重要性を改めて認識するとともに、教育者（保育者）としての職責をしっかり果たしたいと思います。

みなさん、共にがんばりましょう。

溜池一太さん、箱根駅伝で4位！！

野洲北中の卒業生で、現在中央大学１年の溜池さんが、１月２日、関東の大学が競う箱根駅伝大会（２０チーム出場）の往路の第１区を力走。まだ１年生ですが、居並ぶ強豪校の中で見事４位で２区の走者にタスキを渡しました。この健闘もあって、中央大は準優勝をしています。溜池さんは４年前の全国中学校駅伝大会（４９チーム出場）で、地元枠（野洲・湖南・竜王によるドリームチーム）の第１区を５位で走っています。

岩井壮太さん、ＳＵＰ世界大会準優勝！！

同じく野洲北中の卒業生で、現在同志社大１年の岩井さんが、昨年９月ポーランドで開催されたＳＵＰ（ボードに立ってパドルで漕ぐ水上競技）の世界大会（ジュニアの部）で見事準優勝の快挙を遂げられました。